

よみがえ

蘇つた

## 翁草原本

高橋 正一

神沢杜口が著した翁草、その巻117「本阿弥の話」の冒頭に記されている「明智光秀を信長公へ吹捧せしは本阿弥光正なり（明智光秀を織田信長へ推挙したの本阿弥光正である）」という一節中の「本阿弥光正」というのは間違いで、有名な本阿弥光悦の実父「本阿弥光二」のことではないだろうか？と、昨年11月『横浜歴史研究会例会発表／明智光秀を織田信長に推挙した人物』及び、『歴史研究759号／明智光秀と刀剣』において述べたが、つい最近、この

推測の正しいことが判明した。そもそも上記の一節（明智光秀を信長公へ吹捧せしは本阿弥光正なり）は、歴史図書社／昭和45年刊『近世史料叢書 翁草』に記されていて、この本は

明治38年、池邊義象博士が『藤井五車楼本』『富岡鉄斎所蔵本』『京都府立図書館本』などの手書き写本を底本として活字化している。おそらく、これらの写本が「本阿弥光正」となっていたのだろうと推測できる。

現在、翁草の写本は、かなりの数が残っており、例えば関西大学に所蔵されている『関大本』も「本阿弥光正」となっていたことは、先ごろ、筆者自身が見て確認している。

それでは翁草のいわゆる原本（神沢杜口自筆本）はどうなっているのか？というと、昭和63年、杜口の実家（杜口は神沢家へ養子に入った）である入江家の子孫宅（当時は大阪府枚方市）で発見、調査に当たった龍谷大学の宗政五十緒教授（故人）が原本と認定していた（認定理由は省く）。

ところがその後、宗政教授は特に翁草の研究を進めることなく、また研究を引き継ぐ者もなかったため、この原本（以下『入江本』）は入江家に、いわば置き忘れられた状態になってしまっていた。

しかし、杜口74歳時の俳句集『其蝸庵（きちょうあん）杜口発句集』を天理大学図書館で見い出され、これを調査読解、『其蝸庵杜口発句集詳解』を出版された在野史家「奥野照夫」氏が、昨年、入江家の子孫と『入江本』を苦勞の末、東京都武蔵野市で再発見された。入江家は、関西から関東に転居していたのだった。ちなみに、この子孫は、昭和63年時の子孫（故人）の甥であり、叔父から『入江本』を託されていたのだった。

さらに奥野氏は、昨年12月、杜口の菩提寺「慈眼寺」で神沢家・入江家、両家の子孫を対面させるといふドラマチックな企画を実現させた。

筆者も昨年2月、杜口命日に慈眼寺で神沢家子孫や奥野氏と面識を持っていたので同席を許され、その際、筆者が比定した神沢家・入江家屋敷跡推定地を案内などもしたのだった。

奥野氏が、神沢家の菩提寺「慈眼寺」及び、入江家の菩提寺「妙傳寺」の過去帳・墓石を調査したところ、両家は元禄以後の約150年間に計4人が、相互に

姻戚関係（養子・婚姻）にあったことが判った（両寺の過去帳・墓石に同一の戒名が複数記録されていた）。しかしなんと近年（明治以後と思われる）、両家は互いを全く知らなかったというのに驚いた。まさに「去る者は日々に疎し」である。

さて、この『入江本』の件（くだん）の部分にはなんと書いてあったのか？当初、巻117は欠本になっているとのことであったが、後日、散逸していないことが判明（巻106～110が欠本）。今年になって奥野氏に確認していただいたところ、はたして「本阿弥光正」ではなく「本阿弥光二」であった（「奥野氏撮影」写真四角枠内参照）。



筆者の推測が当たったことにな  
るので「我が意を得たり」と素  
直に嬉しかったが、新たな疑問  
も湧いてきた。

それは、『入江本』の「光二  
という文字は「本阿弥の話」の  
中に3ヶ所も出てくるが、その

全ては間違えようもなく「光二  
と読めるのに、多くの写本が「光  
正」となっていることである。  
それはともかく、光二と明智  
光秀の関係性もより現実感が高  
まったので、さらに調査を進め  
たいと思っている。

なお、奥野氏は『入江本』が  
原本である根拠を最初に原本認  
定した宗政教授以上に見い出だ  
しており、近く論文を発表され  
ること。楽しみである。  
『入江本』には、史料上も整合

性が取れる「光二」と書かれて  
いたわけだが、これも原本であ  
る傍証くらいにはなるかもしれ  
ない（笑）。